TREE of International Exchange

先生たちのための 国際交流のとびら

ACCU

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現をミッションとして、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。その活動の一つとして、2001 年より日本と韓国・中国・タイ・インドとの間でそれぞれ二国間の教職員国際交流事業を行ってきました。2022 年 2 月現在は文部科学省委託「新時代の教育のための国際協働プログラム」として実施している本プログラムの 20 年にわたる成果と参加者の声を現場の方々の手に届きやすい形でまとめるため、本書 “TREE of International Exchange - 先生たちのための 国際交流のとびら - ” を日本語・英語の 2 言語で制作することとなりました。

本書のタイトルに入っている “TREE”は、プログラム関係者のためのウェブサイト “Asia-Pacific Educators’ Platform: TREE”に由来します。教職員国際交流プログラムは Transformative learning（変容する学び）、Respect for diversity（多様性への理解と寛容性）、Exploration（探究）、Exchanges（交流）の場です。

本書は国際交流の「場」の紹介（第 1 章）、先生方の声を聴くインタビュー（第 2 章）、2021 年度の教職員国際交流トピックス（第 3 章）で構成されています。プログラムに参加したことのある方もない方も、本書を通して国際交流の場そのものや、そこに集まる先生方の声を感じて、「自分も参加してみたい」と思っていただけたなら幸いです。

最後に、本書の制作にあたり多くの方にご協力いただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
国際教育交流部

TREE of International Exchange

先生たちのための 国際交流のとびら

CONTENTS

3 はじめに

7 第１章　教職員国際交流にようこそ

8 ようこそ！ TREE of International Exchange へ

13 つながりを作る、輪を広げる

14 アジア地域の教職員同士が出会い、互いに学び合う場

15 - 韓国

16 - 中国

17 - タイ

18 - インド

19 第２章　プログラム参加者の声

20 対面でもオンラインでも、互いを尊重して学び合う先生方

22 インタビュー 日韓交流

「地球市民とは、自分の地域をよく知っている人

―小規模校同士の教職員交流で見つけた共通点」

#１：　谷　篤彦 先生

#２：　コ・ヨンナム 先生

34 インタビュー 日中交流

「あらゆる体験は生徒に還元するために」

赤松　潤子 先生

41 《 中国の実践事例 》

「日本の『人生すごろく』が中国へ！？

15 分の学びが授業設計を変える！？」

42 インタビュー 日タイ交流

「前例のない『再会』を実現した国際交流への熱意」

#１：　ウィシタ・ゲサラック 先生

#２：　ナロン・シリムアン 先生、ティラダー・ウドムスップ 先生、ブサロー・パオディン 先生、ロンシヤー・カンタシマー 先生

#３：　シン・プロムメーン 先生

54 インタビュー 日印交流
「一歩踏み出して始まった交流　リスペクトしあい、
互いを更に知っていく」
シッダルタ・チャクラバティ 先生
松井　市子 先生

64 インタビュー後記

65 第 3 章　教職員国際交流トピックス 2021-2022

66 教職員国際交流トピックス 2021 - 2022
68 ユネスコやESDに関するできごとと教職員国際交流プログラム
70 オンライン交流のいま
73 教員研修への活用
74 プログラム写真

78 ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）について
79 おわりに

教職員国際交流にようこそ

第 1 章

＼ようこそ！／ TREE of International Exchangeへ

教育を通した国際交流の機会は、子どもたちだけでなく大人にも開かれています。共通の興味・関心や課題、あるいはモヤモヤを抱えていたり、新しい取り組みを始める仲間やきっかけを探している教員の仲間と、地域や国を超えて交流してみませんか。

ACCUの教職員国際交流プログラムの主役は先生。ここは「先生が変わる 子どもが変わる 学校が変わる 学びの場」です。ACCUは先生自身が変容するきっかけを提供するとともに、プログラムが終わっても、それぞれが経験を教育現場に還元していくことを後押しします。

教職員国際交流プログラムでは、プログラム参加前後を含めて多様な活動に取り組んでいただきます。参加者は、事前準備から参加後の体験の共有まで、さまざまな活動を通して新しい考え方や視点にふれることになります。他者とつながりながら互いの共通項を見つけたり、言語化できていなかった課題を発見したりすることで、自分の外側と内側の学びを深めていきます。

《 期間 》 ・対面の場合は約 1 週間
・オンラインの場合は 1 回限り、1 か月の間に数回などさまざま

《 動画 》 教職員国際交流事業の紹介動画（日本語字幕）
https://youtu.be/uc8XblvsjvQ

事前準備

プログラムの参加者は、交流相手国の教育事情や、教育政策と教育現場での取り組みについて講義を通して学びます。
また、相手の国のことだけでなく、国際交流や国際理解、地球規模課題と教育の関わりについて考えることで交流の準備をします。

体験

対面のプログラムでは、外国を訪問して現地の学校や教育機関、文化施設に直接足を運ぶなどの機会があります。訪問を受け入れる側は、自分たちの地域・学校に海外の教職員を迎え、ともに過ごすという体験をすることになります。

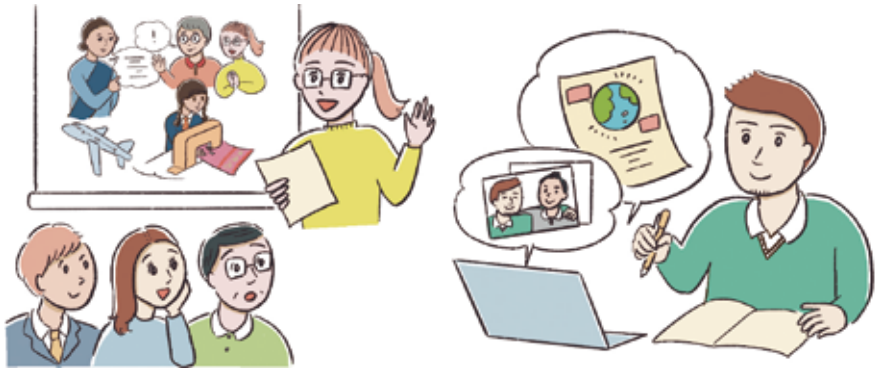
COVID-19パンデミック以降は、オンライン上での交流活動も実施しています。画面を通して直接対話や交流を行ったり、動画を視聴したり、アプリケーションを活用した共同作業をするなどの体験を提供します。

相互作用

海外を訪問する教職員には、相手から学ぶ・吸収するだけでなく、自らの経験や考え、問いを共有することも期待されています。交流授業、質疑応答、交流会などの場に積極的に参加することで、お互いの学び合いが深まります。

オンラインでも対面でも同じように、学び合いから生まれる相互作用を大切にしています。

他者への共有・発信



本プログラムでは、学びや体験、感想などを共有することを、大切なプロセスと考えています。

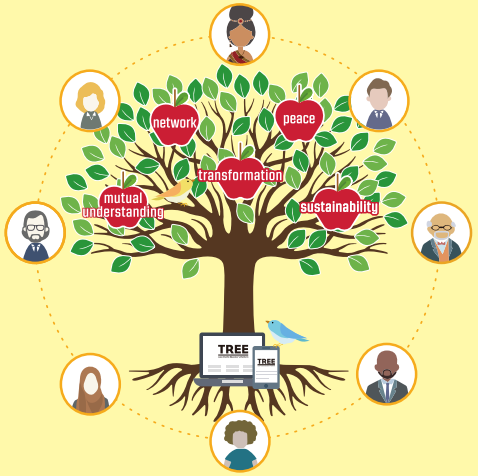
プログラムの中では、報告会での発表や報告書の提出を通して学びを共有していただく機会があります。また、プログラム終了後には周囲に体験を話したり、文章を発表するなど、学びを周囲に広げていくことを期待しています。
活動報告やプログラムの感想は、未来のプログラムに生かされていきます。TREEというウェブサイト(P.13)を使い、参加者同士で共有しあうこともできます。

海外の教職員を迎える

海外の教職員を迎えると、学校全体が「学校訪問」を通して交流したり授業をしてもらったり、あるいは「交流会」を通してじっくり対話の機会を持つこともできます。それをきっかけとして、クラス間交流・学校間交流を行ったり、派遣プログラムに受入校の教職員が参加したりなどの様々な展開があります。

つながりを作る、輪を広げる

プログラム専用 SNS “Asia-Pacific Educators’ Platform：TREE”で国内外の教職員と知り合おう！



“TREEって、なに？”

TREEは、教職員国際交流事業に参加・協力した国内外の教職員がつながるための会員制 SNSで、2020年に日本語版・英語版の本格運用がスタートしました。

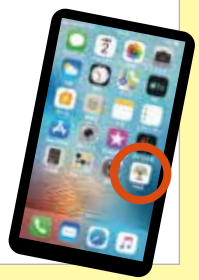
Transformative learning(変容する学び)、
Respect for diversity(多様性への理解と寛容性)、
Exploration(探究)、
Exchanges(交流)の頭文字をとって TREEと名づけられました。

TREEに参加する

こちらの QRコードから会員登録ページにつながります。
(PC・スマートフォンどちらも可)

① 会員登録の申請を行う
② 管理者による本人確認(3営業日以内)
③ 登録完了メールを受信

◎ スマートフォンのホーム画面にブックマークを貼ると、アプリのように 1タップで接続でき、便利です。



こんな時に使います	登録できたら…
・教職員国際交流プログラムにおける、事務局から参加者への資料・動画等の提供 ・プログラム参加者同士の情報交換 ・交流相手やプロジェクト参加者を探す ・自分の教育活動を発信する ・国際理解教育などの情報を収集する	・プロフィール写真を設定する ・友達検索や申請を行う ・興味がある談話室、参加するプログラムの談話室に入る ・ほかのユーザーの投稿を見て、コメントを残してみる ・自分でも発信してみる

アジア地域の教職員同士が出会い、互いに学び合う場

ACCUは、2001年からユネスコ・国際連合大学・文部科学省の委託を受けて、教職員間の二国間での国際交流事業を実施してきました。

最も長く交流を行ってきたのは韓国です。その後すぐに中国が加わり、この 6～7年でタイとインドに交流が広がりました。20年間で多くの教職員がプログラムを通して出会い、学び合いを深めてきました。

ここでは、ACCUの視点から、それぞれの国との交流の軌跡を紹介します。

日本
JAPAN

主催　文部科学省

企画・実施・運営　ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

日本全国の多種多様な教育機関で働く幅広い世代の教職員がともに参加しています。

のべ 1,171名の教職員が派遣プログラムに参加（2021年 10月現在、オンライン含む）
のべ 139名の教職員が海外教職員との交流会に参加（2021年 10月現在、オンライン含む）
のべ 913の教育委員会・学校・機関が海外教職員の訪問を受け入れ（2021年 10月現在、オンライン含む）

プログラム年表

2001年	韓国との交流プログラム開始
2002年	中国との交流プログラム開始
2010年	プログラム開始 10周年
2015年	タイとの交流プログラム開始
2016年	インドとの交流プログラム開始
2020年	プログラム開始 20周年、Asia-Pacific Educators' Platform：TREE の運用開始

韓国
The Republic of Korea

参加者へのインタビュー → P.22

パートナー機関　韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）、韓国教育部（MOE）

2001 年から 2021 年 10 月までの間に、2,238 名の教職員が参加しました（オンラインを含む）。

プログラム年表

- 2001　韓国教職員招へいプログラム開始
- 2003　日本教職員韓国派遣プログラム開始
- 2005　韓国政府日本教職員招へいプログラム開始
- 2018　プログラム参加者が2,000名を突破
- 2020　プログラム開始 20周年

中国

The People's Republic of China

参加者へのインタビュー → P.34

パートナー機関　中国教育部(MOE)

2003 年から 2021 年 10 月までの間に、1,732 名の教職員が参加しました(オンラインを含む)。

プログラム年表

- 2002　中国教職員招へいプログラム開始
- 2003　日本教職員中国派遣プログラム開始
- 2007　中国政府日本教職員招へいプログラム開始
- 2010　プログラム参加者が1,000名を突破
- 2021　プログラム開始20周年

タイ

Thailand

参加者へのインタビュー → P.42

パートナー機関　タイ教育省(MOE)

2015 年から 2021 年 10 月までの間に、90 名の教職員が参加しました(オンラインを含む)。

プログラム年表

- 2015　タイ教職員招へいプログラム開始
- 2018　参加者が 50名を突破 タイ政府日本教職員招へいプログラム開始
- 2019　プログラム開始5周年

インド
India

参加者へのインタビュー → P.54

パートナー機関　インド教育省(MOE)、インド環境教育センター(CEE)

2016 年から 2021 年 10 月までの間に、71 名の教職員が参加しました(オンラインを含む)。

プログラム年表

- 2016　インド教職員招へいプログラム開始
- 2019　参加者が 50名を突破
- 2020　プログラム開始 5周年

プログラム参加者の声

第 2 章

参加者の
“声”

対面でもオンラインでも、互いを尊重して学び合う先生方

2001年から2021年の間に、5,000人を超える先生方が教職員国際交流プログラムに参加しました。大きな数字に見えますが、一人ひとりはどんな先生なのでしょうか？

第２章では、日本と韓国、中国、タイ、インドとの交流プログラムに参加した先生方へのインタビューを通して、参加者の声から交流プログラムを見ていきます。

インタビューでは、お互いの普段の呼び方に合わせて名前を表記しています。姓で呼び合うこともあれば、名前で呼び合うこともありますが、それぞれにその場で使われていた呼び名を尊重しました。

日韓交流

Japan × The Republic of Korea

地球市民とは、自分の地域をよく知っている人
—小規模校同士の教職員交流で見つけた共通点

インタビューに答えてくださった方々

谷　篤彦 先生
徳島県那賀町立鷲敷小学校　教諭
2020年度 韓国教職員招へいプログラムサブプログラム
アウトリーチプログラム(オンライン)に参加

コ・ヨンナム 先生
麒麟高等学校　教諭
2020年度 韓国教職員招へいプログラムサブプログラム
アウトリーチプログラム(オンライン)に参加

インタビューの背景

14〜15ページでも紹介があるように、教職員国際交流プログラムにおいて最も長い歴史をもつのは日本と韓国の交流です。2020年、ACCUでは初めて日韓間の「アウトリーチプログラム」を行いました。これまで地理的な理由から交流の場所になりにくかった島しょ部や山間部の小規模校にプログラムの範囲を広げるために実施されたものです。日韓交流における新しい取り組みかつ、互いに大いに学びあえたプログラムとなったことから、当時プログラムに参加した日韓の先生各1名にそれぞれインタビューを行うこととなりました。プログラム当時も、話をするたびにたくさんの共通点が発見されましたが、今回のインタビューでもどこかで打ち合わせをしたのではないかと思うほど、共通点のあるメッセージがお二人から出てきました。

#1：　谷　篤彦 先生

ACCU ： 今回、初めて ACCUの教職員国際交流プログラムに参加していただきました。オンラインで少人数の国際交流というのは、先生にとってどのような体験になりましたか。

谷　篤彦氏(以下「谷」)： もともと、私は海外の先生とお話しをするという機会が今まで一度もなく、国際交流自体が初めてでした。また、オンラインなのでどのような形になるのかなとどきどきしながら参加しましたし、私のような、(教員としての)経験が短い者が参加していいのだろうかと思っていました。実際に参加してみると、通訳さんも交えて韓国の先生のお話をじっくり聞くことができたので、本当に勉強になりました。オンラインではありましたが、一人ひとりの話を聞かせてもらう時間があったことがよかったです。

ACCU ： とくに韓国の先生方は、経験豊富な方も多くいらっしゃいましたね。韓国の先生と交流して、印象的だったことは何ですか。

谷：普段は、色々な取り組みをされている方と交流する機会や、自分で思っていることを口に出したり他の人の話を聞いたりする機会があまりありません。そんな中で、参加された方はみなさん芯があるというか、やりたいと思ったことをどんどんされているという印象を受けました。実践そのものも勉強になりましたが、一教師としての心構えというか、そのたくましさのようなものに勇気をもらいました。

ACCU ： プログラム参加当時も、地域の課題に焦点をあてた学習を子どもたちと一緒に行っているというお話をされていました。プログラムに参加された後は、先生はどのような実践を行われているのですか。

谷：今年度(2021年度)は、地元の特産品に阿波(あわ)番茶というものがあり、伝統的な作り方をしている発酵茶なんですけれども、それを題材に子どもたちと一緒に茶摘みをして発酵させるという取り組みをしています。地元の農家さんと交流した

り、番茶がどのように地元の人に受け入れられているかを調査したりインタビューをしたりといった活動をしています。

今の学校に勤務して３年目になりますが、ようやく自分のやりたいことにチャレンジできるようになってきた感覚があります。最初は、経験年数が短いということもあって様子を見ていた部分もありますが、今年は管理職や学校に色々とお願いをして、やりたい活動をさせてもらうようになりました。そうする中で、一緒に協力してくださる先生や、興味を持って声をかけてくださる人も増えてきたんじゃないかなと思います。

ACCU ： 活動の幅が広がって、子どもたちも楽しんでいるのではないでしょうか。

谷： そうなんです。とても楽しんでいます。過去に担任していた子どもたちから「去年はこういうのがなかったのに」と言われたり羨ましがられたりして、それはもう「ごめんね」としか言えないのですが。そういう活動が増えてきて、自分自身も楽しんでいます。

ACCU ： 今のお話を聞いているだけでも、一年間でも活動がぐっと変わったというのを感じます。

谷： はい。それを大きく後押ししてくれたのが、去年の交流です。それまでは、色々なチャレンジをしながらもネガティブになってしまうことがあったんですが、色々な方のお話を聞いて刺激を受けて後押しされたというか、もう一回前に進まなければと思って頑張れたという部分はあります。

ACCU ： 先生の活動は、どんな風に企画を考えて、計画して実行しているんでしょうか。

谷：「あんなことできるかな」「こんなことできるかな」というのは、常日頃考えています。そういうことがすごく好きで、常にどんなことができるか想像しています。ニュースを見たりしながら、こんな人を学校に呼んだら面白いんじゃないかと考えたりすることが、趣味のようになっています。多忙感もありますが、ほかへの影響とか、自分が大変になるのではとか、その葛藤のなかで一歩踏み出す勇気があるかどうかというところが大事です。番茶を作りたいというのも、前々から少しずつ考えていたことです。学年の初めから大体の計画は立てていますが、活動をしながら広がっていくこともありますし、子どもたちの考えももちろん変わっていきます。軌道修正をしながら進めていくのを本当に楽しんでいます。

ACCU ： やはり、そうやって活動を広げていく中で、地域とのつながりや、子どもたちの発表する場というのも増えてきているのでしょうか。

谷： はい。例えば番茶農家さんが協力してくださって、「また来年もするけんな」と言ってくださっています。子どもたちのほうも、体験したことを地域の人に伝え返すというか、番茶をあまり知らない方に伝えていきたいと言っているので、コロナ禍でもできることをどんどん計画しています。

ACCU ： また国際交流のほうに話が戻りますが、先生にとって、今回の交流は教育活動をより豊かなものとして進めていくきっかけになりましたか。

谷： 自分自身はもともと、あまり国際的な視野を持てていませんでした。どちらかというと狭い範囲での活動を中心に行ってきたので、やっぱり国際的な視点を得られたのは自分の中でとても大きいです。自分としては、社会で活躍する子どもを育てたいとは元々思っていましたが、本当に国際的に活躍できるような子ど

もを育てたいという気持ちも芽生えるようになりましたし、今はそれが授業づくりにも活かされていると思います。

ACCU ： 色々な先生方とお話をすると、国際交流のプログラムがあってもハードルが高くて参加しにくいという話が出ることがあるんです。先生も、そのように感じられることはありましたか。

谷： そうですね。ベテランで経験豊富な方が、日本代表として参加しているというような意識が自分の中でもあったので、こんな自分が参加していいものだろうかという、自分自身の中でハードルをつくっているところはありましたね。

ACCU ： どんな条件があれば参加しやすくなるでしょうか。

谷： オンラインは自分にとっても参加しやすかったです。これをきっかけに韓国に行ってみたいという気持ちも今すごくあるので、参加する第一歩としてオンラインというのはいいですね。また、自分が参加するだけではなくて、話し合いの様子を見学できたら面白いし、参加しやすくなると思います。

ACCU ： 一度見ることができれば、自分も参加できるかもと思ってもらえるか

2020年度韓国招へいアウトリーチプログラム

もしれませんね。最初は小規模に、参加者が「この人にも参加してもらいたいな」という知り合いを誰か連れてくるくらいがいいかもしれません。

アウトリーチプログラムでは、交流の対話をする中で、互いの悩みや課題も共有できたらいいなと思っていたんです。小規模で複数回の交流があれば、先生たちにとっても少しは話しやすくなるのではないかと。実際に「悩みを共有する相談室」というテーマで実施した回もありましたが、どうでしたか。

谷： 最初は「これは話してもいいものかな」と思っていましたが、韓国の先生の悩みごとを聞いて「自分も一緒だな」と感じました。参加されている方が同じような課題を抱えているというのは、嬉しいというか、共感できたというか、ほっとしたところもありました。自分と同じように思っている方がたくさんいると感じて、自分からも話すきっかけになりました。それは本当によかったです。

ACCU ： 谷先生のインタビューの後日に、韓国のコ・ヨンナム先生にもインタビューをさせていただくのですが、谷先生からなにかコ先生へのご質問はありますか。

谷： コ先生は高校の先生でいらっしゃいましたが、韓国は大学受験が非常に大変という印象を持っています。そうした中でユニークな実践をするのは、小学校・中学校以上に苦労が多いのではないかと、話を聞きながら思っていました。コ先生は、いつもにこにことご自身の実践を話されていたので、すごく楽しみながらされているような印象も残っています。まさに、そんなコ先生がどのように若手時代を送られてきたのか、振り返りながら教えていただきたいなと思います。

ACCU ： 谷先生にいただいたご質問はお預かりして、ぜひコ先生に質問したいと思います。

では最後に、これからどういう先生になって、どんな子どもたちを育てていきたいと思っていらっしゃいますか。

谷： あまり大げさなことは言えませんが、自分が今やろうとしていることを続けられるようにしていきたいです。それから、自分の中で抱えるだけではなく、アウ

トプットしていくことの大切さをこの交流でも学んだので、それを自分の実践や日々の活動を通して広げていって、仲間を増やしていけるような存在になりたいなとは思っています。一人でも二人でも、徐々に波を広げていけるような存在になれたらなと思っています。

もともと「地元が好き」というのが、自分の大きな特徴というか取り柄だったので、地元が好きな子どもを育てたいと思って教員になったというところがあります。昔は、自分は地元だけが好きだと思っていたこともあったのですが、色々な土地に行ってみると、案外その土地のことも好きになれると気が付きました。結局地元を好きでいれば、どんな社会に行ってもどんな地域に行ってもどんな国に行っても、自分のいる場所を好きになれるだろうなと思います。自分の経験で恐縮ですが、地元が好きな子供を育てていきたいなという気持ちは学生時代から持っています。

（インタビュー実施 / 2021年 10月 16日）

#2：コ・ヨンナム 先生

ACCU ： 最初に、プログラムに参加された感想や印象について教えてください。

コ・ヨンナム氏（以下「コ」）： 2つお話ししたいと思います。まず一点目ですが、小規模校の先生方同士で話ができたことがよかったです。日韓には多くの共通点があると知っていましたが、話をするにつれて、改めて共通点が多いなと思うようになりました。子どもが減っていることはもちろんですが、地域の人口も減っていて、教育をいかにして行うべきかという話題がでました。そのような環境の中でも、先生方が非常に熱心に教育をされていることを共有できて、大変心が温まりました。二点目としては、学校教育はもちろんのこと、地域を巻き込んだ教育の大切さが印象に残っています。日本から参加されていた先生が、「一回きりで終わるのではなくて、持続的に教育を進めるべき」とおっしゃっていました。環境や言語（ACCU注：八丈島の学校で取り組まれている「八丈学」の中で八丈語を学ぶというもの）というキーワードが出ていて、それらをもって持続的な教育を行うという話がありましたが、韓国ではあまり根付いていない考え方でしたので、学ぶ点が多かったです。さらに付け加えるならば「共有・共感・コミュニケーション」の3つのキーワードで日韓交流をより活発にするべきだと思うようになりました。

ACCU ：「共有・共感・コミュニケーション」は大きなキーワードになりそうですね。プログラムの中でも、共通点の多い学校の先生が互いに声を掛け合う姿が印象的でした。実は、2週間ほど前に日本から参加した谷先生にインタビューをしたのですが、ひとつ質問を預かっています。コ先生は、若手の頃どんな先生でしたか。

コ ： 私が教師になったのは 36歳の時です。30代の前半までは大学院で学んでいました。ですので、教師になったばかりの頃は、同僚の先生とは少し違う考え方を持っているように思っていました。また、これはいつも私が言っていることなのですが「人に人格があれば、その人が行う行動が風格になる。その風格というのがすなわち信頼。信頼が共感を作り出す。そして、その共感が文化になる」。とはいえ、若い人がこのような考えを持つのは不可能だと思います。最初は情熱と真の心さえ持っていれば、若い先生としては成功しているのではないか、とおこがましい話ではありますが申し上げておきます。谷先生を見ていると、すごく情熱にあふれる先生で、とても熱心に真剣に取り組まれていらっしゃるように感じました。問題は、この熱意を持続させることだと思います。これは、一日でどうにかできるものではないので、少し時間をかけて、教職を続けながら持続可能な形に整えていくしかないと思います。

ACCU ： 今のお話も、谷先生に必ず伝えたいと思います。

今、持続していくことが難しいというお話がありましたが、先生が日ごろの教育活動を進めていくにあたって、持続可能性もそうですけれども、どんなことを課題に感じていらっしゃいますか。

コ ： 私は、こうした教育活動を 10年ほど続けてきました。特に最初の 5年間は集中して活動を行い、6年目を迎えたときには、休みがほぼなくなるほどでした。そのような状態になったときに、持続可能性を担保

するためには条件があるのだと分かりました。私は最初「一人で頑張ればいい」と思っていましたが、一人で頑張ってもできるものではないと分かりました。それに気がついてからは、少しずつ、ゆっくりと、足りない部分があってもいいので、周りを見て協力することが重要だと考えるようになりました。最近は少しスピードを調整した活動に取り組んでいます。一人でやらずに誰かと一緒にするということ、これはとても難しいことです。

もう一つの課題は、自発性と能動性です。今は、あらゆることにおいて、何かを強要して行わせるという時代ではなくなっています。OECDの資料の中でも言われていますが、行為者の主体性（エージェンシー）というものがあります。これは、行為を主体的に行うことで真の主体性が発揮されるということを意味しますが、これを学校現場で適用するのはとても難しく、いかにうまく引き出すかということに、常に頭を抱えています。

ACCU ： こうした話題で議論をする機会もあるといいですよね。自発的に行動を起こすのが一番難しくて、悩んでいらっしゃるというお話がありましたが、いま学校で行われている具体的な活動について教えていただけますでしょうか。

コ ： 今は IB教育課程（ACCU注：国際バカロレア機構が提供する国際的な教育プログラム）を推進しています。韓国では、IB教育を先進的に行っている地域として

済州島があげられます。視察に行き、IB教育を実施している小学校、中学校、高校を見て回って学んでいます。学校内で行っているプログラムとしては、このインタビューを受ける直前まで、プロギング（ACCU注：ゴミ拾い（PlockaUpp）とジョギング（Jogging）を合わせた言葉で、スウェーデン発の活動）に参加していました。学校の周りを歩きながらごみ拾いをしています。また、私は身近な生活の中で実践できることは何かということを常に考えています。最近では給食の残飯を減らそうと、1学期の 2 か月間努力をしましたが、まったく減りませんでした。うまくいかなかった理由は、行動が実践に繋がらなかったからです。先生の前ではできても、先生がいなくなるとできないといった状況が見られたのですが、これではいけないと私は思っています。先生がいなくても自ら動けるようにならなくてはいけないですね。ほかにも、日本の事例を参考にして朝顔のグリーンカーテンを作ったり、環境のために花を栽培したりといった取り組みを行っています。

ACCU ： そうなんですね。日本の高校でも、やはり学校や地域の中にある課題を取り上げて、生徒たち自身で解決策を考えて行動に起こすという活動をしていて、やはり日韓の共通点は多いなと思いました。そうした多様な活動の中で、国際交流は先生にとってどんな活動なのでしょうか。

コ ： 国際交流としては、これまでに生徒を連れて日本に 7〜8回訪れました。それ以外にも、ロシアやアメリカ、東南アジアに生徒を連れて行きました。地球市民教育（Global Citizenship Education, GCED）を受けた人はどんな人だろうと考えたときに、普遍的な教養を身に着けている人であり、一つの地域、自分のことだけを考えている人は地球市民とは言えないと思うんです。生徒たちにとっては、国際交流は広い視野を持って未来を見据えることができる重要な機会だと思います。

ACCU ： 大切な機会ですね。先生の国際交流についてはいかがでしょうか。

コ ： 私が生徒たちと一緒に国際交流を始めたきっかけは、日本の文部科学省のプログラムで 10日間の日本研修に参加したことです。ですので、先生の国際交流

はもちろん、当たり前に重要です。現在、教育は未来に向かったものにシフトしつつあります。日本もすでに実施しているでしょうし、韓国も未来教育を目指しています。未来志向の教育において教師の考えや価値観は子どもたちに直接影響を及ぼすものですから、先生の国際交流というのはこの上なく重要だと思います。日本での研修に参加する前は、私は平凡な英語教師でした。毎日授業だけを行うような教師だったのですが、日本に行ってきてからは様々な活動をしています。特に日韓の平和、環境、地球市民教育、持続可能な未来などについての活動をしています。2015年の夏に日本を訪問し、その5か月後には生徒 24名、教員 4名で日本を訪れました。行動を起こす勇気をくれたのも、日本での研修がきっかけですから、この場を借りて改めて感謝申し上げたいと思います。

ACCU ： 日本に来られたことがきっかけと聞いて嬉しく思います。ほかの先生にも聞いているのですが、これからどんな先生を目指して、どんな生徒を育てていきたいと思っていらっしゃいますか。

コ ： 私は 36歳で教師になったので、管理職や専門職を目指すことは制度上の難しさがあります。今後は献身的に子どもたちといい時間を過ごしていきたいです。それから、さらに学ぶため、来年は休職して大学院に行くことを考えています。私の地域では子どもも、住民の人口も減ってきています。単なる英語の先生という役割から抜け出して、地域の教育の専門家になるために勉強しようと思っています。

ACCU ： 学び続ける先生の姿勢を尊敬します。
話題が変わりますが、プログラム参加当時の学校から異動されたとお聞きしましたが、新しい学校でも、以前いらっしゃった高校でのたくさんの活動の経験が生かされているのですね。

コ ： 以前の学校で行っていた活動を、引き続き新しい学校でも行っています。今勤務している麒麟高校ではこれまでなかった取り組みなので、何か新しいことをやっているなという風に見られています。地域の住民を学校に呼んで、ともに活動をすることもあります。5月から動き始めましたが、楽しくやっています。

ACCU ： ありがとうございます。先生が本当に献身的に、地域の教育に取り組まれていることを感じます。最後に改めて、先生が考える地域の教育の魅力、今いらっしゃるような地域で地球市民教育を進めていく思いを語っていただけたらと思います。

コ ： 私が高校生の頃は学校で勉強さえしていればよかったのですが、今は、知識だけではなくて共感、コミュニケーション、協働などの能力が必要になっています。こうしたことは、学校だけでなく地域で学ぶことができると思います。地球市民教育ではグローカルという言葉を使います。グローバルとローカルが合わさった言葉です。地球市民教育というのは、自分の住んでいる場所、自分の故郷で 99.9%行われるべきだと私は思っています。自分の生まれた地を知らずして、地球市民教育などありえません。地球市民教育というのは、周りを知ることから始めなければならないと考えています。

パウロ・コエーリョが書いた『アルケミスト―夢を旅した少年』という本で、主人公は真の人生を求めて旅に出ますが、その答えは…（ACCU注：物語の最後の展開にあたる内容が含まれるので「…」としました）というストーリーの展開があります。人生の価値は、近いところにあるのだと私に教えてくれた本です。地球市民教育においても、私たちの生活や人生は、遠くにあるのではなく近くにあるのだと私は思っています。韓国においては、地球市民教育を行う上で、平和と環境が重要になってくると考えるので、それを信じて実践しています。しかし、まだまだうまく実践できていない、何かが足りないと思うところがあるので、大学院にいってさらに学びたいと思っています。

（インタビュー実施 / 2021年 10月 27日）

2020年度韓国招へいアウトリーチプログラム

日中交流

Japan × The People's Republic of China

あらゆる体験は生徒に還元するために

インタビューに答えてくださった方

赤松　潤子 先生

兵庫県立青雲高等学校　校長
2019年度 中国政府日本教職員招へいプログラム（中国派遣）、
タイ教職員との交流会に参加
2020年度 日中教職員のオンライン交流に参加

インタビューの背景

2021年10月現在、COVID -19の影響で教職員国際交流プログラムはオンラインで実施しています。

赤松潤子先生はコロナ禍の直前、2019年に中国を訪問するプログラムとタイ教職員との交流会に続けて参加され、2020年にはオンラインでの交流プログラムにも参加してくださいました。アジア地域を訪れることになった意外なきっかけや社会科教員の授業づくり、管理職としての働きかけなど多岐にわたるお話を伺いました。

ACCU ： まずは、2019年の中国派遣プログラムに参加されたきっかけからお話しいただければと思います。

赤松潤子氏（以下「赤松」）： 2019年度は、兵庫県立川西明峰高校で教頭をしていました。川西明峰高校は当時、SDGsやESDを教育の柱にして、ユネスコスクールの加盟校になることを目指して教育を行っていましたので、海外との交流や生徒同士の国際交流が盛んに行われていました。2018年には、若手の先生にACCUのプログラムで韓国に行ってもらったという経緯がありました。次の年（2019年）は中国へ、という話がありました。本当は私ではなくもっと若い先生に行ってもらいたかったのですが、教員が2週間学校を離れて、海外に行かせるというのが現場としてはすごく厳しいんですよね。もちろん、授業に穴をあけることになります。たとえ授業の穴が埋まったとしても、テスト期間に重なる時間でしたので、担当科目の試験の採点ができないと1学期の成績処理もできないですし、難しかったんです。そして、誰かいないか？という話になったときに、じゃあ私が、と手を挙げて行かせてもらったのがきっかけでした。

ACCU ：2018年の韓国派遣プログラムで、川西明峰高校の先生とご一緒しました。

赤松 ： 本来は、そういう若手の先生が参加する形が一番いいのですが、確か2018年のときもテストが重なるかどうかという時期で、本当に難しかったんです。ですので、教員にとっては夏休みなどの真ん中にプログラムがあるのが理想なんです。時期はやはり難しいですが、それでもなぜ私自身が手を挙げたのかというと、私が社会科の教師だからということがあります。長く社会科を教えてきましたが、実はアジアに行ったのは、中国に行く2年ほど前、兵庫県の管理職交流でタイに行ったのが初めてでした。タイに行くときも、実は葛藤がありました。社会科の授業で戦争を教える中で、日本がアジアの国にとても迷惑をかけたという話をします。実際に戦争を経験してきた上の世代が、アジアに対して差別意識を持っていたということは認識していても、自分自身はそれをよしとしない人権教育を受けています。とはいっても、私の世代だと、「アジアの人たちは日本人をどう見ているんだろう」という怖さや葛藤を持ちながら生きている人が多いのではないかと思っています。

そんな私が、自分の目で中国を見てくることは、今後自分が退職後に（再任用の制度で）また教員として教えるという点でも大きな意味があります。社会科教育に携わる中で、若い人たちの教材や授業案について「それは違うよね」「昔のことが何にもなかったかのように授業をするのはおかしいよね」とつっこみを入れなければ

いけないこともあると思います。そうした意味でやはり、今の中国の姿、中国の人たちの思いを知るのは大きいことだと思ったので、参加することにしました。

ACCU ： そうでしたか。一度タイに行かれたことも、中国のプログラムに参加されるうえで一つのステップになったということがあるのでしょうか。

赤松 ： はい、そうですね。中国でもそうでしたが、タイでは本当に大歓迎していただきました。その時のタイ王国の教育を詳しく見せていただきましたし、もちろん、詳しく話をしていくと議論になる部分も大いにあるとは思いますが、タイの人たちとの出会いを通してアジアの人たちと未来志向で付き合うことができると感じました。そして、中国はどうだろうと知りたい気持ちが強まって、参加することにしました。

ACCU ： 赤松先生に参加していただけて本当によかったです。中国を訪問したときに、急遽、翌日に訪問する学校から「日本の先生に日本のことをお話しいただきたいので、二人くらい選んでいただきたい」というリクエストを受けたのですが、その時に赤松先生ともうお一人の先生が引き受けてくださいました。急なお願いでしたが、前向きに捉えてくださって、日本のこともきちんとお話ししてくださる赤松先生のような方がいてくださって本当によかったです。それから、日本への帰国後に行った中国大使館での報告会でも、赤松先生が訪問団代表のお一人として発表してくださいましたね。面白い発表でした。

赤松 ： 私たち社会科の教員は、常に「ネタ」を探しているんですよね。生徒が「へえ」とか「うそやん」というような話です。中国大使館に行く機会なんて先にあるか分かりません。こんなところだったよと話すのも、授業の貴重なネタになるんです。報告会にも参加したかったですし、そこで発表をさせてもらえるのはすごいチャンスと思いました。

ACCU ： 一つ一つの体験が、授業に還元されているんですね。

2019年度中国派遣プログラム

赤松 ： そうなんですよ。全部がネタになります。今日インタビューを受けていることも、ACCUって知ってる？から始まって、生徒に伝えます。自分の先生が中国に行ったことがあるとか、ユネスコと関わりがあるとか聞くと、身近になりますよね。日本の文科省に行ったこともないのに、中国大使館や、中国の教育部を訪問して、そこで質疑応答をしていたんだっていうこともみんな話します。全部が日本の生徒に還元されることなんですよ。

ACCU ： 赤松先生の「なんでも授業のネタにして生徒に還元する」という姿勢からヒントを得ている方は、周りにたくさんいるだろうなと思いました。プログラムに色々な先生が来てくださるのは私たちにとって嬉しいことなのですが、もともと「若手の先生に参加してもらいたい」という話が出ていたのは、当時の校長先生の方針によるものだったのでしょうか。

赤松 ： そうですね。学校自体をそれこそサステナブルにしていくため、ESDを実現するためには、若い教員に参加してもらって、その経験を後々まで続けていきたいというのが、校長先生が元々考えていらしたことだったと思うんですね。ですが、

環境が許さなかった部分もありますし、2019年には校長先生も異動で変わりました。前校長の取り組みを中継ぎする立場だったのが私でした。それもあって、私が行くのが良いだろうということになり、6月に中国に行きました。それで、実はその年の 12月には韓国にも行ってきたんです。別の機関の日韓校長交流というプログラムでした。最初は日本(東京)に韓国の人が来て交流するという集まりがあったのですが、校長先生の都合がつかなくて私が代わりに東京に行きました。それで、ワーッとしゃべったら「この人おもろいな」と思われて、韓国に行くプログラムに、校長先生だけでなくあなたもおいでと言われて、行くことになりました。そうしてつながっていくというのも私には勉強になりました。中国に行って、韓国に行って、校内で短期でやっていた韓国語講座を常設にするということもできました。そうしたら参加生徒がたくさん集まってきて、広がっていきました。

ACCU ： 中国に行かれた後に、中国の高校生を受け入れる企画があるとお聞きしていましたが、コロナ前に実現したのでしょうか。

赤松 ： 2019年の11月に、日中植樹交流で中国の生徒たちが川西明峰高校に来ました。一日交流をして、植樹会をしたのですが、全部のクラブを挙げて歓迎して、色々な取り組みをしましたね。私が中国に行ったことがどう生かされたかというと、その交流の受け入れがうまくいったことに繋がっていったと思いますね。きっと私が行かなくてもできたと思うのですが、教頭として、よりウェルカムな気分で迎え入れることができました。

ACCU ： 先生自身の受け入れる態勢に生かされたんですね。

赤松 ： 準備と後押しですね。先生たちの後押しもできましたし、「もし困ることがあっても大丈夫だよ」と言うことができました。

ACCU ： そういう体験が一つあるというのは大きいものなんですね。

赤松 ： そうですね。安心感を持って中国の生徒たちを受け入れることができるのが大きかったと思っています。当時の学校には中国で働いていた経験があって、中国語を話せる先生が一人いらっしゃったんですよ。その先生と一緒になって相談しながら進めていきました。生徒たちの受け入れがスムーズにいったことの一つの要因でしたね。

2019年度タイ教職員との交流会

もともと日中植樹交流が先に決まっていたので、その前段として誰か若い人が ACCUのプログラムに参加して、つなぎ役になってほしいという流れがあったと思うんです。それは当時、校長先生がしっかりとプランを持って運営されていたのは大きいと思いますね。その中の一つに(教員の派遣が)位置付けられてたというのが、すごく貴重なことというか、重要なことだったと思います。事前の一つの段階として、より相手国を知る先生を増やすという意味で、現地に行かなくても、プログラムに参加することが自分たちの行事をスムーズに行っていくためにも大事なことなんじゃないかと思いますね。

通常、教師は修学旅行に行く前は必ず下見をするので、それと同じ感覚でいいと思います。まずは生徒たちがふれ合う前に、自分で行って見てみたら？というすすめ方はできますね。

ACCU ： 今先生は通信制の学校に勤務されていらっしゃいます。以前、国際交流を行うことの難しさをお話ししてくださったことがありましたが、具体的にどんなところで困難をお感じになっているんでしょうか。

赤松 ： 基本的に、通信制の学校は生徒が毎日学校に来ることはないんです。公立の通信制高校は、一年間でスクーリングと試験を合わせて、全部登校したとしても学校に来るのは年間で最大 20日間です。さらに、効率よく単位の取得に必要なスクーリングの回数をクリアすれば、それ以上登校しなくてもいいんです。なので、必ずしも同じ生徒が毎週決まった曜日・時間帯に来るとは限らないんです。登校する日もそれぞれの人が選ぶので、いつ登校しても構いません。そこで国際交流について考えたときに、生徒が集団で参加することは難しい状況です。一人ひとりということになるので、(全日制の)前任校のように生徒全員で国際交流をするのは難し

いですね。その中でできることは、やっぱり若い先生たちに対して話をすることです。自分自身もこういう風に海外を経験させてもらったから、できるだけ外に目を向けよう、実際に自分の目で見てこようと色々な場所で話しています。

ACCU ： 学校全体で生徒さんを含めた国際交流は難しいというお話でしたが、教職員の交流に限定すればそれなりに可能性はあるということでしょうか。

赤松 ：（可能性は）ありますね。国際交流に興味のある先生は若手でもいます。その興味を失うことがないように、年の初めに「学校経営方針」を校長として話すときに、その最初に世界のこと、SDGsや ESDについて話しています。世界は今こういう風になっていて、教育の中でも ESDを見据えるのが大事なんだという話を必ずするようにしています。プログラムがあったら、先生たちにもどんどん紹介していけたらなと思っています。通信制の学校の方が、生徒が登校する日数が少ないという点で先生方が参加しやすい状況です。コロナがなければもっと声をかけられたと思います。

ACCU ： 教員交流会などもオンラインで行うので、先生にも声をかけさせていただきたいと思います。ぜひ先生の学校の先生に紹介してください。

最後に、管理職でいらっしゃる先生から、このプログラムにもっと多くの人が参加してもらえるようなメッセージをいただけますでしょうか。

赤松 ： 百聞は一見に如かずです。マスコミからのメッセージは結局一方的で一面的だと思うので、自分の目や耳を信じることが大切です。民間交流は、最終的には大きな意味では平和を守ることにつながってきます。一人ひとりは悪い人たちではない、というところに信念を持てなければ交流は続けられないですし、平和な国でいることが難しくなると思います。ですから、もっと民間の人たち、教育者同士が子どもをどう育てるかというところで話をしながら仲良くなっていくことが大事なので、若い人たちを中心に、もっともっと交流を進めていってもらいたいと思います。

（インタビュー / 2021年 10月 27日）

中国の実践事例

日本の「人生すごろく」が中国へ！？ 15 分の学びが授業設計を変える！？

プログラム期間の学びが海外での授業実践に展開した例をご紹介します。2020年度中国とのオンラインによる教職員交流で、2019年度中国教職員招へいプログラムに参加した上海市莘庄中学副校長　严熙（Yan Xi）先生よりポストコロナ時代における学校のあり方についての発表がありました。「学校生活〜新しい生活様式」、「教育・授業〜新しい出来事」、「今後の教育〜新しい展望」の3つの側面からの話題で、2つ目の「教育・授業〜新しい出来事」に関して、興味深い内容を披露してくださいました。

2019年の訪日の際に、千葉県立流山おおたかの森高等学校へ向かうバスの中で、訪問先の仲田郁子教諭（当時）の家庭科を取材した NHKラジオの国際放送（NHK WORLD-JAPAN Radio）を流しました。それは、日本の家庭科で学ぶキーワードから今の日本社会を見る「Japanese life through key word 」という15分の番組で、「人生設計」がテーマでした。仲田教諭の家庭科では、生活設計に関わる単元として「人生すごろく」を用い、生徒が高校卒業後の自分の人生に対して想像力をもち、学校の教科を多面的に理解し、人生の過程におけるさまざまな課題に向き合い解決する力を養うことに主眼が置かれています。

この番組にインスピレーションを得た严熙（Yan Xi）先生は、帰国後に、学校で学科と生涯学習を融合させるために研究を重ねていきました。児童が知識を得る過程の中で、将来にわたってより多く活用できる知識を学べるように、そして培ったスキルにより、人生設計の能力を向上させるよう、知識と将来を併せて考えていきました。例えば、生物と生活、生物と職業などを組み合わせ、さらに職業の内容や必要なスキルや学歴などを細かく分節して掘り下げて検討し、一連の活動を通じて児童が教科に対する学習意欲を高めていくように工夫したそうです。

このような学びの波及は数字に表せないものですが、このプログラムの大切な要素としてお届けします！

日タイ交流

Japan × Thailand

前例のない「再会」を実現した国際交流への熱意

2018 年度にタイ教職員招へいプログラムに参加した先生方

インタビューの背景

「再会」というキーワードで、2018年にタイ教職員招へいプログラムに参加した6名の先生にインタビューをさせていただきました。この先生方は、2019年に日本教職員がタイを訪問するのに合わせ、受入校校長のナロン・シリムアン先生の呼びかけで様々な地域からカンチャナブリー県に集まったメンバーです。地域も校種も年齢も様々な先生方に、プログラムでの学びや現在の教育活動、「訪問団同期」で深めてきた交流について伺いました。3回にわたって行ったインタビューの内容をお伝えします。

1：ウィシタ・ゲサラック先生

ACCU：2018年に東京と宮城県を訪問されましたが、先生がプログラムから得たもの、実際に活用していることにはどのようなものがありますか？

ウィシタ・ゲサラック氏（以下「ウィシタ」）： プログラムでの経験がとても役に立っています。なぜかというと、今タイではまた洪水が起こっているからです。私が教えているタイ北部で起こるのは地震か洪水なのですが、その自然災害に対して、宮城を訪問した経験がとても役に立っています。例えば、自然災害に対してどうやって対処するのか、そしてどういう風に助け合うのかというシステムについて、そして防災についても多くを学びました。そのことについて記事を書きまして、学校で発行されている冊子に投稿しました。特別支援学校向けの冊子で、タイ国内のほかの特別支援学校にも送られています。

国際交流によって、教える技術を常に更新できるような経験ができると考えています。テクノロジーは常に変化していますし、私の学校もまた新しいテクノロジーを教育に取り入れることにはかなり対応していると思いますが、日本で学校訪問をしたときにも、新しい教材を使っているなということに気が付きました。自分の学校で使っているものもありましたが、新しい発見もありました。そういった意味でも有意義でした。

ACCU：先生は特別支援学校から参加されましたが、今回のように様々な校種の先生方がいらっしゃるプログラムはいかがでしたか。

ウィシタ：いろいろな種類の学校からの教師が参加していて、経験や意見を交換できるので、ものすごく視野が開けると思います。例えば問題解決をするときに、いろいろな状況があるということを知ることができます。時には解決方法を思いつかない問題に直面することがありますが、そうしたときにいいヒントをもらっています。また、私たち自身も特別支援学校の教師としての提案ができて、支援学校以外の学校の先生方にもいい情報を差し上げることができると思っています。

ACCU：LINEグループでつながっていると聞きました。

ウィシタ：この LINEグループはちょっと特別かもしれません。このプログラムに参加する前は、特別支援学校同士でつながることが多かったのですが、今回のグループは様々な学校の先生がいらっしゃるので、さらに幅広い話ができています。

ACCU：ウィシタ先生は 2019年にタイ派遣プログラムで日本の先生方が訪問したカンチャナブリーにあるナロン先生（同プログラム参加者）の学校に集まってくれました。先生にとってどのような体験になりましたか。

ウィシタ：再会できたことが嬉しかったですし、カンチャナブリーでの視察の機会を得たこともよかったです。カンチャナブリーは、タイと日本にとって歴史的な関係の深い場所です。クウェー川の橋や鉄道建設の洞窟なども見に行きました。また、日本の先生とは一緒に学校を見学しながら意見交換もできました。

ACCU：さきほど、教える技術についてお話がありましたが、先生はタイで日ごろ自分たちの教える技術を磨くために、どのような勉強をされているのですか。

2018年度 タイ教職員招へいプログラム

ウィシタ：常に研修を受けています。特にこの 2、3年、タイでは大きな教育カリキュラムの変化がありました。コロナ禍によって、対面が減ってオンラインの授業になったので、教師も対応していかなくてはなりません。また、タイでは世界の動きを見据えた研修を常に行っています。日本のプログラムで災害対策について学んだことも、このコロナ禍で教師や子どもたちに共有していますよ。

ACCU：先生が周囲の先生方に多くの影響を与えてきたということがお話から伝わりました。ACCUも、先生方のためにさらに良いプログラムを作っていきたいと思っているのですが、先生からなにかアドバイスをいただけますか。

ウィシタ：まず、今回のプログラムには、視野を広げたいとか理解力を高めたいとか、学ぶ意欲のある先生方が参加していたことがとてもよかったです。

　また、個人的には歴史が好きなので、プログラムに歴史の要素を入れたらもっと印象的なものになると思います。私が参加したプログラムは十分印象的でした。宮城県に行って、津波のあった場所で知った事実と、そこで感じた気持ちが合わさって忘れられない経験になっています。ですが、私の場合は歴史に関心があるので、新しい知識とともに、そうした（歴史のような）日本が持っているものを見せていただけると、その時のプログラムの印象もさらに長く続くと思いますし、また戻りたいなという気持ちにさせてくれると思います。

ACCU：とても参考になります。ありがとうございます。最後に、これから先どんな先生になっていきたいか、あるいはどんな将来を目指していらっしゃるか、夢をお聞かせください。

ウィシタ：そうですね。やっぱり、後輩教師のいい手本になりたいです。例えば意見交換の場には積極的に行きたいですし、海外の教育の視察をした際には、どんどんシェアしたい、伝えていきたい。それが後輩の教師たちのやる気につながり、得た知識をどんどん発展させていってもらいたいなと思います。

（インタビュー実施 / 2021年 10月 11日）

#2：ナロン・シリムアン先生、ティラダー・ウドムスップ先生、ブサロー・パオディン先生、ロンシヤー・カンタシマー先生

ACCU：2018年に日本を訪問したプログラムの中で印象に残っていることや、タイに戻られてから経験をどう生かしているのかについて教えてください。

ナロン・シリムアン氏（以下「ナロン」）：私立校の訪問からは、管理職として大いに刺激を受けました。教育の質が高く、自分を発展させようという方針が強いところが印象に残っています。21世紀を生きるものとして、環境に配慮する姿勢、地球市民性を育む様子が見られました。見学して学んだことは、自分の学校運営においても英語教育やコンピューター、スポーツ、芸術などに力を入れるという形で生かしています。また、宮城県を訪問したときには、市民の協力による復興や、防災訓練・避難行動がしっかり根付いていることが印象的に残りました。帰国後に自分の学校で、教師や生徒を集めて防災訓練などをしました。タイにも火事や洪水はあるので、この点においてとても影響を受けました。今回のプログラムで様々なアクティビティに参加してとても感動しましたし、教師としてのインスピレーションを受けて、自分もかなり変わったと思います。学校運営にもっと真摯になりたいですし、教師だけでなく生徒の人材開発、施設の改善、テクノロジーの導入など、さらに良くしていきたいです。

ブサロー・パオディン氏（以下「ブサロー」）：私はナロン先生のような管理職ではなく教員なので、まずは自分が見てきたことを生徒たちに話しました。タイに帰ってから最初に学校に行った日に、自分が日本で撮った動画と写真をスライドにして生徒たちに見せました。私と同じように、子どもたちも「ワオ！」という反応をしていました。タイに帰ってきてから子どもたちに心がけさせているのは、清潔さを保つことです。日本に行って本当に街がきれいだと思ったので、子どもたちには「掃除しなさい」「ごみを拾いなさい」と今も熱心に教えています。また、プログラムが終わってからは、トモヒロ先生（交流会の日本側参加者）といつも教え方などを相談しあっています。コロナのせいで実現できていませんが、今でも交流は続いていて、近いうちに Zoom でお互いが教える子どもたちの意見交換をしたいと話しています。とにかく、前回の日本のプログラムに参加した際にはとても感動して、その感動は今も心の中にずっとあります。

2019年度 タイ派遣プログラム

ティラダー・ウドムスップ氏（以下「ティラダー」）：日本を視察したのは自分にとってとても良い経験になりました。特に感動したのが、特別支援学校の取り組みでした。在学中に企業や工場で実習をしていたことに驚きました。というのも、タイでは在学中にそういった現場で実習をする機会がないからです。次に感動したのが防災対策です。自然を考慮した防災の対策をとっているところが印象的でした。

それから、たしか中学校だったと思うのですが、自動販売機の売り上げのお金をユニセフに寄付する活動を行っている学校がありました。社会貢献になっていて良いと思ったので、私の学校でも、生徒が社会貢献に参加できるような活動を行いたいです。

ロンシヤー・カンタシマー氏（以下「ロンシヤー」）：SDGs（持続可能な開発目標）と PBL（課題解決型学習）を教育活動に生かしています。私の県では、木の伐採という課題があります。木を伐採している人に話を聞いてみると、お金も仕事もないのであるものを切って売るしかないと言われました。こうした方々に職業支援をして、木を切らずに生活できるようにするべきだと考えました。教師としてできることは本当に些細なことですが、まず子どもたちの森を愛する気持ちを育てようと思いました。そのために植林活動を行い、実際に自分たちで世話をするうちに、森の木を切ってはいけないという気持ちが育ってくると思ったんです。また植林以外にも子どもたちが手に職をつけられるような訓練を行っています。例えばお茶やコーヒー、パンの作り方など、農業用地を破壊することなく生活できる技術を教え始めました。学校の名前から Paeklangモデルという名前を付けたこのプロジェクトは、県から賞をもらいました。このような活動ができたのは、日本でのプログラムに参加して SDGsと PBLについて学んだことで、地域の環境を大切にすることに意識が向いたからです。

ACCU：とても勉強になります。先生が木の伐採という地域の課題に気が付いてから村の人にインタビューし、植林活動や手に職をつけるような教育活動に至るまでのプロセスは、先生がお一人で進めたものでしょうか。それとも、子どもたちと一緒にそこからスタートされたのでしょうか。

ロンシヤー：まず、地域にはこのような課題があるという問題提起を子どもたちに行いました。その上で子どもたちに、何をしたいですかと聞きました。ですので、子どもたちと一緒に、それから他の先生、保護者、学校全体と、みんなで考えて行いました。

ACCU：次に、ナロン先生にお伺いしたいんですけれども、先生の学校では2019年に日本の先生の訪問を受け入れてくださいましたよね。

ナロン：そうです。

ACCU：そのとき、色々な地域に住んでいるタイの先生方を呼んでくださって日本の先生と一緒に会えるようにしてくださいましたが、それを思い付いて、実行に移されたいきさつについて先生からお聞きしたいです。

ナロン：まず、なぜ思い付いたかというと、日本に行ったときに先生方の質の高さに感動したからです。生徒を中心に考えているプロの教師で、世界中のどこに

行っても教えられるレベルだなと感動しました。なので、ぜひ日本の先生方とタイの先生に交流してほしいと思いましたし、私の学校の教師だけではなくて、2018年のプログラムに参加したほかの学校の先生方にもぜひ参加してほしいと思ったのです。各学校の管理職に宛てて招待状を出し、公務として来てもらうことができました。公式にも非公式にもいろいろな話ができました。タイと日本の間で知識の交換ができたり、お互いによく理解しあうことができました。みんなのモチベーションが非常に上がったと思います。なので、もし将来機会があれば、タイでまたこのような視察の機会などを持っていただきたいですし、お互いに意見交換をする機会も持っていただきたいと思います。それは国だけでなく、世界の発展にも役立つと考えるからです。

ACCU：ありがとうございます。モチベーションが上がったというのは、先生の学校でお勤めされている先生も含めてその場に集まった皆さんの、ということでしょうか。

ナロン：そうですね、全員です。特に私の学校の教師たちはとても興奮していました。なぜかというと、あの時、日本人の先生と英語で話さなければならなかったので、その後で教師自身の英語学習に対する意欲がとても上がりました。また、私の学校では日本人の先生を雇用して、一コマ授業をもってもらうことになりました。さらに、AFS（ACCU注：主に高校生の留学プログラムを実施する団体）を通して生徒を一人日本に送り出すことになっています。日本の方との出会いによって、みんなのモチベーションが上がりましたが、それは教師だけでなく生徒も同じです。

ACCU：すごい影響力ですね。このプログラムには「先生が変わる 子どもが変わる 学校が変わる 学びの場」というキャッチコピーがあるんですけれども、まさにそれを体現していらっしゃるようだなと感じました。今回、ナロン先生のようなベテランの先生もいらっしゃれば、若手の先生もいらっしゃいました。こうして、色々な世代の集まったグループで一緒に活動することはどんな経験でしたか。

2018年度タイ教職員招へいプログラム

ロンシヤー：私はグループの中で最年少でした。参加者に選ばれたとき、すごく興奮して、一緒に参加するメンバーがどこの誰なのかということを調べたら、自分が最年少とわかってすごく心配になりました。なぜかというと、私は教師の経験が2、3年しかなかったからです。でも実際に出会って日本で一緒に過ごしてみると、年齢は学びには関係ないんだなと実感しました。

ティラダー：少し補足してもいいですか。実は今回のプログラムは、年齢差のある方たちが参加していたからこそ、パーフェクトなものになったのではないかと思っています。年配の先生も若い先生もいらっしゃって、その中間でつないでくださる世代の方もいたので、家族のように温かい雰囲気になりました。どちらかの年齢に偏るよりも良かったと思います。

（インタビュー実施 / 2021年10月12日 タイ時間午前中）

#3：シン・プロムメーン先生

ACCU：先生がこの交流プログラムに参加したきっかけを教えてください。

シン・プロムメーン（以下「シン」）：教育省の案内を見て、このプログラムを知りました。私の勤めている地域（チュンポーン県）は、30年前に台風の被害を受けました。南部で海の近くにあります。私はそこにある、知的障害のある子どもを受け入れる新しい学校で働いています。以前、日本の「さをり織り」という織り機が学校に導入され、その指導で日本から講師が来たことがあります。その時に、

日本に職業訓練の視察に行けたらなという思いがわきました。別のプログラムを検討しましたが、管理職に向けたものであり、応募できませんでした。ですが、今回のプログラムは自然災害、特別支援教育というキーワードがあったので、日本側が求める人物像に自分が合致するのではないかと思いました。自分の興味がある内容で、日本と交流できると思って応募しました。

ACCU：実際にプログラムに参加した感想を教えてください。

シン：特別支援学校の教員なので、宮城県女川町の特別支援学校の先生たちと意見交換をしたことが印象に残っています。生徒指導や、身体障害のある生徒の職業訓練、生徒の日常生活について意見交換をしました。そのうちに、タイの生徒もまだまだ能力開発の余地があると思うようになりました。訪問校では、生徒の興味や特性を伸ばす教育をしているところがよかったです。例えば、製菓やサービス業の職業訓練がありました。一番感心したのは、高齢者の介護職の実習です。iPadも活用して仕事をしていた様子を覚えています。学校での生徒の安全に対する対応策など、タイでも参考にして少しでも改善していきたいです。

ACCU：シン先生も、2019年にはカンチャナブリーに集まってくださいました。ナロン先生から招待状が来たそうですが、最初にお誘いがあったとき、先生はどう思いましたか？

シン：招待状が来たときはすごくわくわくしました。実際にカンチャナブリーに行って日本の先生をお迎えできたときは、すごく幸せな経験になりました。なぜかというと、私たちが日本に行ったときに、皆さんがとても温かく迎えてくださったからです。だから、自分もあの時に迎えることができてとても誇らしく思いました。2019年は、私の学校は残念ながら日本の先生方の受け入れ先には選ばれませんでしたが、この先機会があれば、タイ南部の学校でもぜひ受け入れたいと思います。

ACCU：プログラムに参加したことは、先生のその後の教育活動にどう生かされているのでしょうか。

シン：日本での経験は、自分を高めることにもつながりました。今後の教育方針、ビジョンを管理職に提案しました。経験を報告するだけでは足りないと思うので、実際に使える形で（経験を）応用させるべきだと思っています。

ACCU：どのような教育方針なのですか。具体的に詳しく教えていただけたらと思います。

シン：職業訓練カリキュラムの充実です。保護者の希望を反映させたものです。カリキュラムで身に着けたことが、卒業後にどのように職業に役に立つかを考えました。家業が農家であれば家業に合う技能を身につける、といったことです。それ以外にも、自立できるようなカリキュラムにしたいと思っています。教育によって機会を得られるような方針にしたいと思っています。日本での視察を経て、日本の経験を応用してカリキュラムを組むようになりました。日本で見学した学校では、サービス業の職業訓練や、実習の機会がありました。全員が同じではないですが、生徒に合った目標に沿う、実践的な内容にしたいと思いました。

2018年度タイ教職員招へいプログラム

（インタビュー実施 / 2021年10月12日 タイ時間午後）

日印交流

Japan × India

一歩踏み出して始まった交流
リスペクトしあい、互いを更に知っていく

インタビューに答えてくださった方々

シッダルタ・チャクラバティ 先生
リー・コリンズ高校　科学部門長／主幹教諭
2020年度 インド教職員招へいプログラム（オンライン）に参加

松井　市子 先生
新潟県立津南中等教育学校　教諭
2020年度 インド教職員との教育交流会に参加

インタビューの背景

インドの西ベンガルで物理・数学を教えるシッダルタ・チャクラバティ先生と新潟県で英語を教える松井市子先生にお話を伺いました。松井先生の「防災をテーマに生徒間交流をする仲間を探しています」との呼びかけにシッダルタ先生が応じる形で、2021年の夏からオンラインでの授業交流を開始したお二人。インタビューを行った10月半ばまでに５回の交流を重ね、見学を含めると200名以上が参加したそうです。

コロナ禍以降に始まった交流ですから、参加している先生方も生徒たちも、お互いに直接会ったことはありません。お二人が率いるこの交流がうまくいっている背景にはどんな工夫や努力があり、これからの活動にどんな展望を持っていらっしゃるのでしょうか。

ACCU ： まず、お二人がプログラムに参加されたきっかけ、経緯をお話しいただけますか？

シッダルタ・チャクラバティ氏（以下「シッダルタ」） ： CEE（ACCU注：Centre for Environment Education。インドでこのプログラムの運営を行っている機関）からの案内でこのプログラムを知って応募し、西ベンガル州からの参加者として選ばれました。コロナ禍ということで、直接日本に行くことはできませんでしたが、非常にすばらしい機会をいただいたと思います。国際交流という意味で、本当に学びの扉を開けてくれたプログラムでした。このような経験をしたのは私の人生の中で初めてでした。

また、このプログラムは自分の視野をさらに多様に広げてくれました。参加後、この教職員間での交流を通した経験を、生徒のレベルで再現することはできないかと考えるようになりました。

松井市子氏（以下「松井」） ： 英語の教師なので、常に海外の交流相手を探しています。機会があれば交流して、生徒たちに英語を使ったコミュケーションを取る機会を持たせたいと思っています。そんな中、生徒が ACCUのプログラムに参加したことをきっかけとして、このプログラム（インド教職員との交流会）があることを知りました。インドにも知り合いはいたのですが、なかなか生徒同士の交流は実現できていませんでした。今回ひょっとしたら生徒同士の交流まで行けるかもしれない、という期待を持って参加しました。

ACCU ： シッダルタ先生は、プログラム前から、歴史やスポーツなどを通して日本に関心をお持ちだったと話していらっしゃいましたが、そんなこともきっかけの一つになったのかなと、お話を聞きながら思い出していました。

シッダルタ ： 日本の生徒との交流は、私にとって人生の中で初めての体験でした。また、国と国をまたいだプロジェクトも初めてでしたし、その中でインドの文化や自分の意見を日本の生徒に紹介する機会を得られたこと、またお互いには違いがあるけれども、たくさんの共通点があったことなど、振り返ってみるといろい

ろと考えさせられるところがあります。また、生徒たちのリアクションを見ることができたこともよかったです。教育者として、一番嬉しいと感じるのは、生徒たちの心に何かを残すことができるということです。彼らの反応を見ることで、それを経験できたのは嬉しいことでした。

ACCU ： 松井先生への質問です。生徒間の交流をスタートするにあたって、「防災」というテーマや、具体的な活動内容も含めてご提案をいただいたのですが、テーマを決めるに至った背景について教えてください。

松井： もともと、プロジェクトベースの授業を年間の三分の一ほどやっていました。テーマは大体私が決めていたのですが、昨年度は生徒たちが震災学習で東北地方を訪れたことで、探求活動のテーマをもっと深めたいという彼らの思いがありました。防災について探求をしていたグループから四コマ漫画を使った活動がしたいという提案があり、英語の授業でどうやってできるかというところが始まりでした。ただ、私自身も一緒に震災学習に参加したものの、防災に関しては素人なので、生徒たちと一緒に専門家の方の講演会にオンラインで参加し、つながった専門家の方々に指導案を見ていただきながら、アドバイスをもらって形になりました。非常にやりたかったので、一緒に活動する方を探して TREEを使わせてもらって（ACCU注：プログラム関係者専用サイトで、松井先生が参加者を募る投稿をされました）シッダルタ先生に出会えたといういきさつがあります。

シッダルタ： 今テーマにしている防災は、世界中の喫緊の課題です。インドでの自然災害は、日本でよく起こるものとは異なるものもありますが、両方の国の生徒たちがグローバルな課題にともに取り組んでいくといった姿勢は変わりなく、それがこのプロジェクトで実現できたと思います。両生徒とも多くの取り組みをしましたし、またインドの生徒にとっては、日本に触れる機会となりました。こういった活動はインドの中で、我々がパイオニアとしてできたのではないかと思っています。うまくいっている要因としては、それぞれが本当に献身的にこの交流プロジェクトを前に進めてきたということ、また、成功させたいという意志が強くあったということ、いろいろな困難や課題もありましたが、それを乗り越えるだけの意志があったということがあると思います。

ACCU ： 交流をしたくても、なかなかその一歩が踏み出せなかったり、忙しくて難しいとおっしゃる方は少なくないと思うのですが、どのような学校のサポートによって、あるいは先生ご自身の情熱でこの交流を進めてきたのでしょうか。困難さについてもお聞かせいただければと思います。

松井： 学校のサポートと私自身の情熱の両方があります。私自身も熱い思いがありますし、コロナ禍によって日本全体で ICTを使うという教育方法がぐんと推進されたタイミングだったので、オンラインが推進されて環境が整い、学校からもどんどん使ってくださいと言われたので、その勢いが応援してくれたなと思います。

ACCU ： シッダルタ先生はいかがでしょうか。

シッダルタ： 最初に教員交流のプログラムに参加したときは、私は日本のことに関してまったく知識を持っていなかったですし、日本の先生方も、インドの教育制度などに関しての理解はあまり高くはありませんでした。今は少し知識が付いてきたと思いますが、当時は日本に対する知識が限られている中でもこういった国際交流プログラムをやりたいという気持ちが強かったんです。それは、特に生徒のためというところがあります。私の生徒がインドにいたとしても、またほかの場所、日本などにいたとしても、やはり私は教育者であり、また教師でもあり

ますので、やはり生徒がこれからの国を作っていく担い手になると考えたときに、こういったプロジェクトの機会を提供するべきだと考えました。

このプロジェクトを通じて、インドと日本の生徒たちが共通の目標やトピックを見つけて、各自の地域で取り組みを行っているのを目にしました。日本でも同じような課題があると知って驚きましたし、それぞれの地域で行っているミクロな活動が、両者が手を取り合って交流することで、より視野と範囲の広い活動になると思っています。最終的には、地域だけでなくてグローバルな目標や活動につなげることが可能になる、このプロジェクトがそうさせてくれるだろうと確信しています。プロジェクトを通して、アイデアやそれぞれが毎日抱えている課題に対する解決策、考え方などを共有しています。共通の課題がこんなにもたくさん、毎日のように出てくるということが最大の発見でした。学術的なリサーチも世の中には多くありますが、それとは違う形で、このような取り組みを行う必要性もあると考えます。

プロジェクトを行う上では、本当に多くの課題、困難がありました。やはり、インクルーシブに、生徒たち、社会、コミュニティのためにやっていきたいという気持ちがあったからこそ乗り越えられたと思います。特に私の勤めている西ベンガルでは、公立の学校と私立の学校はインフラがまったく異なります。もしかしたらほかの州は違うかもしれませんが、我々の住んでいる地域では大きな差があります。私の勤める学校(公立)にはスマートフォンを持っている子はいませんし、このパンデミックで職を失ってしまった保護者も少なくありません。学校でもオンラインのクラスはありますが、限定的なものです。そのような環境下でもこのプロジェクトを推し進めていくために、卒業生やデバイスを持っている人に呼びかけて、スマートフォンやパソコンを使わせてもらったのです。もちろんインターネットなどのインフラの難しさもありましたけれども、そのような背景で続けてこられたということです。

ACCU ： これまでのお話をうかがっていると、お二人が中心となって、学校だけでなく地域も巻き込んで、この授業が進んでいることを感じます。また、それぞれがそれぞれの状況で異なるご苦労を抱えながらも、毎回、毎月一回の交流を実現してくださっていて、その先生の情熱というのが海を越えて私たちにも届いていますし、もちろん生徒たちにも届いているんだろうなと感じています。

シッダルタ： ありがとうございます。

ACCU ： 今、交流を始めて二か月ほど経過しましたが、その間で、生徒さんや同僚の先生方の反応はいかがですか。

シッダルタ： まずお伝えしたいのは、多くの先生や生徒がこの交流プロジェクトを知っているということです。西ベンガルだけではなく、ほかの地域…例えば、インドの南部や西部、北部にもつながりを持っていますが、インド中の知り合いの先生方が、こういったプロジェクトがあるということを認識しています。彼らは非常にポジティブな反応を見せてくれてますし、圧倒されるくらいの問い合わせやフィードバックをくれます。また、このようにオンラインで交流プロジェクトを行うという新しいアイデアについての感想もあります。こうして良い連鎖反応を起こすことができれば、西ベンガルだけではなく、他の地域でもこうしたことを起こせるのではないかと思っています。

生徒や同僚の教師、保護者も、このプロジェクトをエキサイティングなものだと認識しています。次はいつ、どんなトピックで、どんな風に議論をするのか、またどういった結果が出たのということを熱心に聞きたがったり、知りたがったりしています。

松井： 日本側の生徒の反応なんですけれども、中学３年生は、この２年間コロナの影響で ALT(外国語指導助手)が来ることもできず、外国人との交流がすごく限られていたので、初めて外国の生徒と交流することができてすごく興奮していたと聞きました。ぜひ続けたいと言っているようです。私の担当している学年の生徒については、やはり意思疎通ができたという経験が自信につながっていると感

じます。一生懸命画面を見ながら何とか伝えようとしている姿や、終わった後の満足感を見ていると、これはぜひ続けたいなという風に感じています。教員からは、授業の中でどう実施しているかという問い合わせが非常に多いです。課外活動や学校行事など、授業以外での取り組みはいろいろな学校でやっていると思います。ただ、授業の中で行うとなると、シラバス上の問題であったり教科書との兼ね合いであったりを気にされる先生が多いので、どうすればできるのかとよく聞かれます。

ACCU ： 私もオンラインで交流の様子を拝見しました。生徒さんたちにとってこうした体験が貴重な時間であり、もっとやりたいという火が付けられる様子を私も感じています。松井先生がおっしゃったカリキュラムや教科書との兼ね合いは、ACCUでも先生方からよく耳にするお話です。何かヒントがあれば、教えてください。

松井： 私の授業では 3年前から、AIがベースになった教材に切り替えています。授業で行っていた文法の説明や小テストをAIベースの教材を使って行うようにし、その分の時間を全てこのようなコミュケーション活動にあてるようにしました。生徒たちに、良いツールがあるから使ってみようと紹介し、分からないところは授業でフィードバックするという形に変えて、その代わりに授業では、生徒同士だったり、私(教員)とのやり取りを楽しもうというスタイルにしました。もしほかの教科でもそういう風に悩まれている方がいらっしゃったら、まずはコンピューター、ICTや AIで自分の役割を代わってもらえるものがないか探して、それを代替として使ってみると、だいぶ時間の使い方が変わってくると思います。

ACCU ： ところで、お二人はすでに数か月交流をされてきていますが、お互いの尊敬できるところ、素晴らしいと思うところについて教えていただけますか。

シッダルタ： 松井先生のいいところですが、まずは、本当に誠実でしっかりとしたサポートをくださるということと、このプロジェクトに対する献身ですね。その部分が素晴らしいなと思います。松井先生は非常に親しみやすい性格をお持ちの方ですし、プロジェクトを通して多くの場面で助けていただきました。私のほうでの技術的な問題が起きた時など、私はあまり機械に強いほうの人間ではないのですが、そういった時にもサポートを常にしていただいていますし、そういったところがやはり松井先生の魅力だと思います。

松井： まず、ロックダウンという環境にもかかわらず、広範囲の地域、いろいろな学校から生徒を集められるというのが驚くべきことでした。交流をしながら、本当にぎりぎりまで調整されているのがよく分かるんです。最後まで生徒たちに声をかけられていることが伝わって、それが何よりもすばらしいです。想像を絶する苦労をされているのだろうと思います。もう一つは、いつも交流に本当に幅広い年齢層の先生方が参加されていることです。若い先生からかなり年配の先生方まで入られていて、インドという国の教育の奥深さを痛感しています。私たちとはまた次元の違う、歴史や人と人とのつながりとか、そういうものを学ばせてもらっています。本当に学ぶことが多すぎてびっくりしています。

シッダルタ： ありがとうございます。光栄に思います。私としては、この交流に関してはこれからも続けたいですし、続ける試みをしていきたいです。インドの生徒であろうと日本の生徒であろうと教師としてしっかりと良い影響を与えていきたいという風に思っているので、どのような交流も良い機会と捉え、できる限り最後まで関わり続けてこの交流の活動を続けていきたいです。交流範囲に関しても、もっと拡大したいと思っています。地域内の他の学校も隅々まで参加できるような形にしたいですし、インド国内全体で参加できるような形にしたいです。このプロジェクトを知った方々からも、いろいろな反応、提案をいただいています。今はパンデミックもあり、多くの学校が閉鎖状態だったので、なかなかそういった方々の参加は叶いませんでした

が、これはもう確実に克服できる問題ですから、拡大したいと思っています。

ACCU ： すでにシッダルタ先生から「更に広げていきたい」というお話もありましたが、いま行っている交流について、改めて今後の展望を教えてください。

松井： すでに、ほかの学校の方からも一緒にやりたいという提案をいただいています。オンラインでは授業の時間帯を合わせることが難しいので、まずはシッダルタ先生とも使っている Flipgridという非同期のオンライン上の動画交流ツールを使ってお互いに知っていくことができると思います。そこからオンラインの交流に発展させて、かつ無理せず交流を続けていきたいです。特別な授業変更をしないとできないとか、何か変えないと成り立たないという状況では長く続かないと思うので、できるだけ無理せずに行いたいです。

トピックは交流すればするほどに、知りたい気持ちが広まって深まっていきます。例えば、環境問題やジェンダーの問題をもっと掘り下げてやりたいと生徒たちと話していますし、私は言葉の教師ですので、文学とか人の思考に関わるところをインドの方々からもっと学びたいです。日本の文学も素敵なので、お互いの文学の素晴らしさを交流できたらいいなと思っています。

シッダルタ： 同感です。私自身も、そして多くの生徒も日本語をもっと学びたいと思っています。反対に我々のほうで、ベンガル語とか、ヒンドゥー語を紹介したり教えたりということもできますし、そういった交流も提案したいなという風に思っています。

ACCU ： すでに次のアイデアがたくさんおありなのですね。今後の活動がとても楽しみです。それでは、最後にお二人から一言ずつメッセージをお願いします。

松井： いつも海外と交流をするときに時差を気にするので、アジア地域での交流がもっと深まったらいいなという風には思っていたんですけれど、先生の知り合いはいても生徒同士の交流まで発展できずにいました。今せっかく日本は ICTが整いつつあるので、たとえロックダウンしている地域があろうが、シッダルタ先生のような熱心な先生がいらっしゃる限りこうした交流は可能だと思います。ですから、ぜひ先生同士が知り合う機会を、ACCUのような取り組みを通して増やしていただきたいです。テーマに関しては、ずっとやりたいと思っているのが、SDGs17「パートナーシップ」（持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する）で、子ども同士がパートナーを組んで地域課題を解決するようなオンライン上の取り組みに発展させることです。

シッダルタ： 今回の生徒間交流は、松井先生が一歩踏み出して実現できたものです。やはりそういったスピリットに感謝していますし、続けるだけではなく、やはり拡大して、また他の方法も考えていきたいです。世界の様々なトピックをコラボレーションしていくことによって、包括的な活動ができるのではないかと思います。すべての先生、また生徒たちにこのような機会を与えるということ、そして取り組みを行う中でも、やはり持続可能であることは非常に求められると考えます。

このプロジェクトの一つの目的は、挑戦することです。さらに、同じアジア圏に住んでいるわけですからお互いの文化を理解しあって、そしてさらにアジアから例えばヨーロッパ、世界に紹介するとか、そうしたことを通して互いにリスペクトしあうということ、またお互いのことを更に知っていくということ、そんな試みをもっとできればと思っています。

やはり教師というものは、しっかりとした取り組みをもって、誠実かつ親身なサポートと協力関係を通して子どもたちを育て、将来の礎のための良い人材にしていかなくてはならないという風に考えています。

（インタビュー実施 / 2021年 10月 15日）

インタビュー後記

第２章では、2018年から2020年の間に対面あるいはオンラインで教職員交流プログラムに参加された11名の先生方にお話を伺いました。

パンデミックの影響を受け、この国際交流プログラムもオンラインに切り替わりました。この１年間、交流方法が限られる中で「相手の置かれている状況を慮る」「じっくりと対話をする」ことの大切さを噛みしめています。そうした経緯から、今年はインタビューという形式で、様々な活動をされている先生方の声を直接届けることになりました。

対面交流の経験を語ってくださった日中交流、日タイ交流のインタビューからは、それぞれの文脈で「自分の目で見てきたものを、自分の教育現場に合わせて工夫し、子どもたちに還元しよう」という熱意が伝わってきました。また、オンライン交流に参加された先生方にお話を聞いた日韓交流、日印交流のインタビューでは、直接会うことができなくても互いを尊重して励まし合える力強さと、外に出かけていけない中でも「自分たちの地域」を深く学んでいくことで海外と協働する可能性を感じることができました。

４つのインタビューを読んだ後には「国の境がどんどんなくなってきているような感覚」が残ります。過去のプログラム参加者の方が「子どもたちに向き合う先生の視線に国の違いはない」と話していたことがありました。国はもちろんのこと、時代も、受けてきた教育も異なる私たちがお互いを尊重しながら分かり合うことのヒントが、先生方の言葉の中にあるような気がします。

インタビューを通して 11 名の先生方には報告書やアンケートには入りきらない個人的なストーリーや思いを聞かせていただきました。こうした形で、貴重なお話を共有することを許してくださった先生方に、改めて感謝を申し上げます。

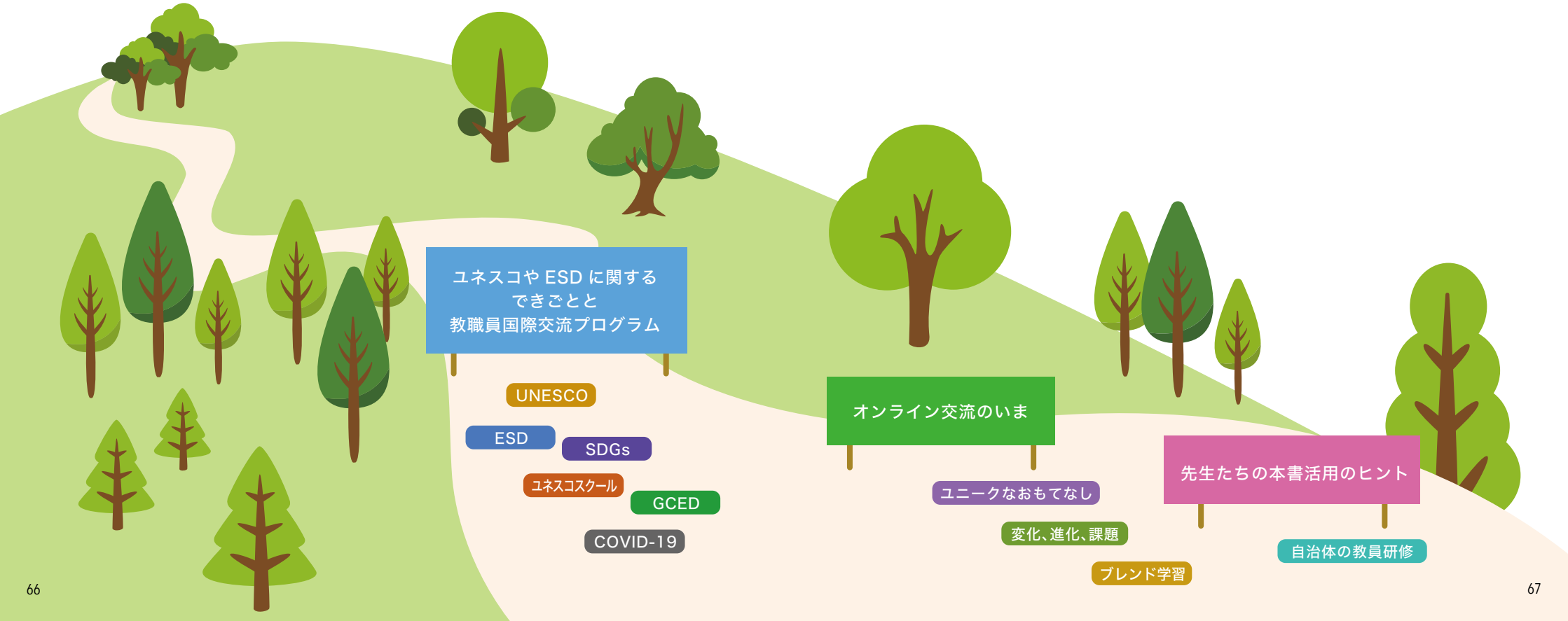
教職員国際交流トピックス
2021 - 2022

第 3 章

教職員国際交流トピックス
2021 - 2022

2021 年度、コロナ禍になって 2 年目。オンラインでの交流プログラムにも慣れて、昨年にはなかった新しいアイデアが取り入れられたプログラムが見られるようになりました。

世界に目を向けると、ユネスコでは 5 月にドイツのベルリンで「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議」が開かれ、日本ではユネスコ加盟 70 周年を迎えるなど、教職員国際交流にも関わりの深いさまざまな出来事がありました。第 3 章では「教職員国際交流トピックス 2021-2022」として、世界のことから交流プログラム、個人のことまで、様々なトピックを紹介していきます。



ユネスコや ESD に関するできごとと教職員国際交流プログラム

持続可能な開発のための教育に関するユネスコ世界会議

2021年には、ドイツ・ベルリンで「持続可能な開発のための教育に関するユネスコ世界会議」(The UNESCO World Conference on Education for Sustainable Development)が開催され、その成果文書として「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するベルリン宣言」が採択されました。

宣言の中では、気候危機や生物多様性の大量喪失、公害、世界的感染症、極度の貧困及び不平等、武力紛争をはじめとする環境・社会・経済的危機に焦点が当てられ、これらの問題の緊急性は新型コロナウイルス感染症の世界的大流行によって増幅しているとされました。そして、これらの課題に立ち向かうため「変化の担い手」を養うために必要とされる ESDに関して16の約束がなされました。その中にはあらゆる段階の教育に ESDを組み込むことや、教育省庁をはじめとした各省庁、すべての関連するステークホルダーとの協力の効果、世界レベルでのネットワーク強化などが含まれています。

日本のユネスコ加盟 70周年と ESD の新しい実施計画

日本では 2021年、ユネスコ加盟 70周年を迎えました。教職員国際交流プログラムと関連の深い内容をここにいくつか紹介します。まず、国内における ESDの推進拠点と位置付けられるユネスコスクールネットワークの加盟校は世界でも最も多い 1,120校(2019年 11月現在)となっています。また、平成 29年・30年(2017年・2018年)に改訂された学習指導要領では「持続可能な社会の創り手」の育成を掲げるなど、全国的な取り組みが始まっています。

2021年 5月には「我が国における「持続可能な開発のための教育(ESD)」に関する実施計画」(第２期 ESD国内実施計画)が策定され、上のベルリン宣言と同じように多様なステークホルダーを巻き込む方策が組み込まれました。

2021-2022 交流プログラムのキーワード(一部)

「多様な文化が尊重され、平和で持続的な社会」。これこそ、ACCUが教職員国際交流プログラムを通して目指すものです。このゴールに向かって、ユネスコの宣言文の内容や国の指針などの大きな共通の課題を基盤としつつ、各国の先生方の声を反映した交流プログラムの企画をしています。参加した皆さんの体験談やアンケートの回答が、次のプログラムに繋がっているのです。

上のふせんは、今年のキーワードとして挙がった言葉の一部です。オンライン交流も２年目を迎えて、様々なことに挑戦した 2021- 2022年の交流プログラム。本書でもいくつかのトピックと写真で紹介していますが、詳細はぜひ ACCUまでお問い合わせください。

オンライン交流のいま

2年目を迎えたオンライン国際交流
変わったこと、課題、進化したこと

パンデミック下でのオンライン交流 1年目だった 2020年度は、何よりも「交流を止めない」ことが重視されていました。感染状況やオンライン・対面などの教育実施形態は、国が変わればもちろん、ひとつの国の中でも地域によって大きく異なります。そのため、感染の拡大につながらないように、比較的コンパクトな内容で慎重に交流プログラムが行われました。場所や時間帯の柔軟性が増したことから、新しい参加者が増えたり、属性や地域が多様になったりなどの良い変化もあった一方で、対面のプログラムと比べると交流の効果を感じにくい課題が残りました。

2021年度に入ると、各国で「より参加型のプログラムであること」「目に見える形での成果」を目指した挑戦が始まりました。共同授業の開発、共同発表など参加者が関与する度合いを高めたプログラムを実施したり、オンラインでの文化体験などの要素を加えたりと、同じ「オンライン教員交流」のように見えてもその中身は大きく変わってきています。

今後互いの国を行き来できる状況が戻ったとしても、交流プログラムはパンデミック以前と同じものになるとは思いません。「オンラインなら参加できる人々」を取り残さない、これまでよりも開かれた交流と対話の場になっていくでしょう。

オンライン交流のユニークなおもてなし

プログラムに参加して「参加証明書」をもらうことはよくありますが、2021年 9月のタイ政府日本教職員招へいオンラインプログラムでは、参加者のアバターが用意され、画面上で参加証明書が授与されるシーンがありました。全員が参加証明書を受け取った後には、アバターの集合写真撮影も行われました。直接会えない分、アバターを活用して参加者を楽しませようという新しい歓迎の形を見ることができました。

また、オンラインによる日韓教職員の対話プログラムでは、国際郵便でグループごとに決まった色の Tシャツが届き、みんなで同じ Tシャツを着てグループ会議に臨みました。オンラインプログラムは「体験」が課題のひとつですが、様々な方法でプログラムに参加した記念やチームの連帯を感じられる工夫が凝らされています。

「ブレンド型学習」国際交流プログラムでの実践

COVID-19パンデミック下で「ブレンド型学習」という言葉を聞く機会が増えたという方も少なくないのではないでしょうか。もともとは、オフラインとオンラインを組み合わせた学習という広い意味の言葉で、対面の講義と動画視聴の組み合わせなどがそれにあたります。

教職員国際交流プログラムにおいては、2021年のオンライン日韓教職員対話プログラムの中で、日韓の先生がグループを組んで、共同授業という形でブレンド学習に取り組みました。交流プログラムのオンライン化で、参加者にとってもプログラム運営者にとっても「成果が目に見えにくい」ことが課題の一つとなっていますが、このプログラムでは「ブレンド型の共同授業」そのものが先生たちの成果となりました。Zoomで日韓の学校をつなぎ、小グループの対話やアプリを使ったクイズなどで児童・生徒が共通のテーマで学びました。交流の際に話題になったニュースを即時にオンラインプラットフォームにアップロードしたり、歴史的建造物のペーパークラフトをカメラの前で相手に見せたりなど、臨場感のあるやり取りでつながる「ブレンド型学習」の体験になりました。

教員研修への活用

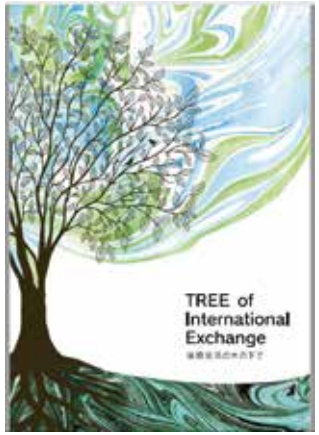
2021年２月に、教職員国際交流事業に参加された方のうち、日本の先生を中心に様々な経験や活用事例を紹介する冊子「TREE of International Exchange―国際交流の木の下で―」を発行しました。執筆協力者のお一人である松岡由美子先生（当時は埼玉県立浦和西高等学校に勤務）は、県の教員研修の場で教材として冊子を活用していらっしゃいます。

「講師自身の教育実践を伝える」という研修の内容に合致していたことと、ご自身も参加されたACCUの教職員国際交流プログラムを、研修を受講する教員の方々に紹介したいと思われたことから教材として選ばれたそうです。

COVID -19の影響で、研修そのものはオンラインの実施となったようですが、松岡先生の紹介を受けた地域の先生方が未来のプログラムの参加者になってくださることを、ACCUは期待しています。

松岡先生のように「私も自身の教育現場で活用したい」という方には、送料をご負担いただけましたら、在庫のある範囲でお送りできます。ぜひACCUまでお問い合わせください。

※ 2021年２月に発行された冊子は、日本語版のみとなります。



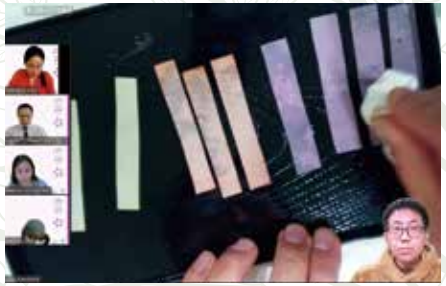
プログラム写真

2021 - 2022

日韓交流

日中交流

日タイ交流



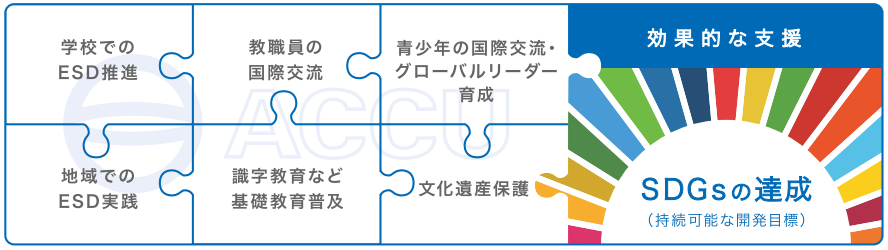
日印交流

ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）について

■ ACCU とは？

ACCUは、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の基本方針に沿って、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に貢献します。

東京と奈良の２つの拠点から、アジア太平洋地域のユネスコ加盟国と協力して教育協力、国際教育交流、文化遺産保護教育の分野での事業を推進しています。2021年４月に設立50周年を迎えました。



SDGs：Sustainable Development Goals

■ ACCU と 教職員国際交流事業

ACCUは 2000年度から約 20年にわたり、国際機関および政府機関の委託を受けて、教職員間の国際交流事業を企画・実施・運営してきました。2021年度は、文部科学省委託「令和３年度 新時代の教育のための国際協働プログラム」のもとで、日本と韓国・中国・タイ・インドの4か国の教職員を対象にした交流事業を実施しています。

https://www.accu.or.jp/
https://www.facebook.com/accu.or.jp/
メールマガジン（月１回配信）のご登録 ：
ACCU広報担当（kouhou@accu.or.jp）まで「メールマガジン登録希望」と書いてご連絡ください。

おわりに

本冊子を最後までお読みいただき、ありがとうございます。ACCU では教職員の皆様を主役とした国際交流事業を通して、実にたくさんの先生方と出会い、そして再会します。その中で私たちも事業の運営側として、多くの学びを得るだけでなく、様々な共感を覚えます。変容する学びの場、変容する先生方をどのように捉え、そして他の先生方にもお伝えできるかが、我々事業を実施する者にとっての命題でもあります。インタビューのなかで、その言葉の端々に浮かんできた先生方の思いを丁寧に紡いでいくことで、アンケート分析や数字だけでは拾いきれない先生方の変容が浮かび上がってきました。それはまるで最初から美しい絵ができることが想定されていたかのように、個別のインタビューがジグソーパズルのようにつながっていきました。

若い先生方からは、これまであまり自分が思っていることを口にしたり、他の人の考えを聞いたりする機会がなかったが、交流を通して一教師としての心構えや勇気をもらえたというお話をいただきました。その若い先生の話を受けてかのように、別のインタビューの場で教員歴の長い先生から「学びに年齢は関係ない、年配の先生も若い先生もいて、その中間でつないでくれる世代の先生もいて、安心してなんでも相談できた」そんなお話を伺い、改めてこの事業を続ける意義を再確認しております。

また、自分だけで頑張ってきたが、持続可能な学びへとつなげていくためにも周りの先生方を巻き込む必要があると気がついた、というお話にあらわされているように、今は個々の持つ知識や経験だけでなく、共感、コミュニケーション、協働といった先生方の自律的で持続的な力が必要なのではないでしょうか。

そのほか、子どもたちに自分が住んでいる「地元」を好きになってもらえるような学びを、これからも引き続き展開していきたい、地元を好きであれば、どんな地域、どんな国に行っても、自分のいる場所を好きになれると思う、といったご意見もありました。まさに、Think globally act locally を実践されている先生ならではのお言葉だと思います。

ACCU 国際教育交流事業の Core Value（基本的価値）は、国境や地域を越えた教職員の学びの場づくりです。先生方の声に耳を傾けながら、今後も様々な機会を創造して参ります。予測できないことの多い現代社会において、私たちは互いにつながり、共に考え、未来を創造していくことが求められております。多様性は生きていく力になります。国際交流のとびらを押してみてください。先生方のお仲間がたくさん待っておられることでしょう。最後に、ここに多くの御経験を惜しみなく共有してくださった先生方に心より感謝申し上げます。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
国際教育交流部長　進 藤 由 美

TREE of International Exchange

- 先生たちのための 国際交流のとびら -

発行日	令和４年（2022年）3月１日
発行	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル TEL : 03-5577-2853　FAX : 03-5577-2854 URL : https://www.accu.or.jp/
制作協力（掲載順）	谷篤彦、コ・ヨンナム、赤松潤子、ウィシタ・ゲサラック、 ナロン・シリムアン、ティラダー・ウドムスップ、ブサロー・パオディン、 ロンシヤー・カンタシマー、シン・プロムメーン、 シッダルタ・チャクラバティ、松井市子、松岡由美子
インタビュー通訳協力	株式会社ISS
イラスト制作（P8〜12）	株式会社テクスト （藤田ハルノ）
デザイン・印刷・製本	株式会社デザイン・モイ （アートディレクション / 今泉明子、　デザイン / 今泉明子　高井美月）
編集	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター　国際教育交流部 進藤由美、伊藤妙恵、岡野晃一、杉戸卓磨、高松彩乃、天満実嘉
編集統括	高松彩乃

©ユネスコ・アジア文化センター2022

ISBN978-4-909607-09-6

Printed in Japan　禁無断転載・複製

この冊子は文部科学省委託 令和 3年度「新時代の教育のための国際協働プログラム」により作成されました。